

第13回教科開発学研究会 博士論文報告

英語劇活動における協働対話がランゲージングに与える影響についての研究

市川裕理（愛知教育大学籍）

論文要旨：

本研究の目的は、英語授業の協働学習における話し合いについて、活動を質的に分析し、どのように知識構築がなされるのかを、社会文化理論に基づいて明らかにすることである。本研究の意義は、英語をどのように教えるかではなく、どのように学んでいるかということについて知見を得ることであり、英語授業における学びのあり方を提案することである。

英語授業において、ペアワークやグループワークが取り入れられることはあるが、その場合、研究や実践の多くはコミュニケーションの道具としての言語能力がどのように向上するかということに注目してきた。社会文化理論は言語をコミュニケーションの道具としてだけではなく、思考を媒介する道具としてとらえている。そのため、言語について何を学んだかという結果ではなく、どのように学んでいるかというプロセスに注目する。そして、そのプロセスを学びとしてとらえるのである。英語授業における話し合いによって、学習者が何を話し合い、どのように学び合っているのかということをも明らかにできれば、教室という集団を基本とする場において、仲間学ぶことの意義が明確になる。これは、持続可能な開発のための教育(ESD)や21世紀型スキルといった新しい教育概念における協働を軸とした学びのあり方に通じるものである。本論文では、協働の中身を分析するにあたって、ランゲージング理論に基づいて、英語授業における英語劇作成のための話し合いに焦点を当て、分析を行った。

まず第1章では本論文の目的と背景について述べた。

第2章では社会文化理論の外国語教育への影響について言及し、ランゲージングに関する先行研究を行った。ランゲージングは、社会文化理論における言語と発達概念を、第二言語習得の文脈に応用した理論である。ここではランゲージング研究の変遷について述べ、言語学習において結果ではなくどのように学んでいるかというプロセスに研究が開かれたことを示した。しかし、ランゲージングの正確性を測定することは、高校レベルの学習者を対象とした場合において効果は期待できないのではないかと問題提起し、本研究の焦点を絞った。

第3章では本研究における分析対象となった英語劇活動について、筆者がどのように授業実践を行ったかについて記述した。教科書の内容に基づいてオリジナル原稿を作成するという難易度の高いタスクにもかかわらず、意欲的に取り組み完成度が高くなるのは、学習者がグルー

プで行う話し合いが鍵になっているのではないかと筆者は考えるに至った。

そこで第4章では筆者が2018年度に行った英語劇活動について、どのような活動を行っているのか、また、活動をどのようにとらえているかということについて、学習者自身の評価を分析した。得られた文字データについてKHCoder3を用いてテキストマイニングを行い、学習者が対話によって伝えるための英語表現について理解を深めていることを明らかにした。

第5章では、2018年度に実施した実践研究で得られた結果を検証するために、活動場面における談話分析を行った。ここでは学習者が実際にどのような話し合いを行い、協働で知識構築を行っているかを明らかにした。分析対象としたデータは、2019年度に実施した英語劇活動における協働対話である。原稿についての対話を分析単位（エピソード）として取り出し、主題の特定を行った。主題とエピソードの質的内容との関連を分析し、英語の知識だけではなく母語の知識を活用し、協働で解釈を行うような発言が見られるエピソードでは知識構築がなされる傾向にあることを明らかにした。このことは、参照する知識の不足から高校レベルの学習者にとっては、正確性を模索するランゲージングは適していないのではないかという仮説を裏付けた。また、同時に英語劇活動における原稿を修正する話し合いにおいては、母語を思考を深める手段として用いて、伝えるための英語表現について理解を深めていることが示された。ランゲージングでは言語化によって自己モニタリングが働き、深い理解がなされると考える。本研究では正確性ではなく英語劇における表現の適切性を模索する場合に、学習者同士のモニタリング機能が促され、協働的足場かけがなされるととらえた。表現の適切性とは英語劇活動における文脈に沿っているかどうかということである。筆者はこの文脈上の適切さを話し合うことが、英語劇活動におけるランゲージングの最大の特徴であり、知識構築に影響を及ぼしていると考えた。

これに従い第6章では、エピソードにおける文脈考慮についての分析を行い、その結果について統計的処理を行った。その結果、エピソードにおける知識構築には文脈を考慮することと特定の主題のエピソードであるということが、エピソードにおける問題解決という要因と比較して有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。このことから、英語劇活動においては、文脈を考慮することが自己モニタリングを働かせ、深い理解へとつながっていることが示された。

最後に第7章では、本研究から得られた教育的示唆について述べ、研究の限界と今後の方向性や課題について述べた。